

訪問リハビリでの趣味活動の支援

医療法人社団永生会訪問看護ステーションひばり 作業療法士 佐藤美帆

はじめに

誰しもが経験した事があると思います。人は好きな事をしている時、驚く程の力を発揮しませんか？とても良い表情になりませんか？だから私は積極的に趣味活動の支援をしたいと思い、障害を持っていても趣味活動を行える工夫をしたいと考えています。今回はその工夫のひとつをご紹介します。

症例

- * 年齢:59歳 性別:女性
- * 診断名:脳梗塞、脳血管性認知症、未破裂動脈瘤
- * 家族構成:夫、長男、長女と4人暮らし keyは夫
- * 家屋:都営住宅5階(階段なし、昇降機使用)
- * 介護度:要介護5
- * サービス内容:デイサービス 3回/週
ヘルパー ティ時の送迎、昼食セッティング
マッサージ 3回/週
訪問看護(リハビリ) 1回/週
- * 福祉用具:ベッド、車椅子(屋内用、屋外用)

経過

(H20~21年:詳細不明)脳梗塞を発症し、右片麻痺、軽度の認知機能低下を認めた。

H21年4月より訪問リハビリを開始。4点杖を使用し数m歩ける程度まで回復し、H23年8月に一度軽快終了となった。

しかし活動量低下から心身機能、ADLとも著しい低下がみられ、H24年5月より訪問リハビリ再開。

H26年5月より現担当の介入開始。介入当初、起居～移乗全般に介助を要した。疲れやすく、端坐位や立位exでは「もう寝てもいいですか?」という発言が多かった。会話は担当者から話題を提供する事が多かった。ADLは食事セッティング介助、排泄は尿便宜ありポータブルトイレで介助、他は全般に介助を要していた。

刺し子の場面①



ターンフープを使用し、非利き手での作業も楽に行える。

刺し子をしている時には自然と背もたれから背を離し、体を前に起こすような姿勢になる。

刺し子の場面②



元々パッチワークが趣味であったため、刺し子では意欲が引き出しやすく、ご本人さんも楽しんで行えている。疲れを忘れ、集中する時間を持てる。

とても素敵な笑顔♪

刺し子を始めてからの変化①



身体面

以前は端坐位になるとすぐに傾き疲れやすい状態だった。

↓
スタッフが目を離していても端坐位を保持し会話をする余裕が生まれている。

精神面

以前は口数が少なく、スタッフからの話題提供がほとんどであった。

↓
会話の量が増え、ご本人から話題提供をするようになった。

刺し子を始めてからの変化②



趣味・楽しみの獲得

元々大好きだった手芸を再開しており、「またできるとは思っていなかった」「こうしてできる事が嬉しい」と話されている。

役割の獲得

花ふきんを娘さんにプレゼントする事を目標にし、介護される受身的な存在から、喜ばれる存在になれる。

まとめ

好きな事を行う事は人を心身ともに元気にします。そのための工夫を一緒に考え挑戦していきましょう。